

第二章 「拳銃」

「どうして-----くれなかった？」

だれかの呼びかけで私は目を覚ました。

ゆっくりと上体を起こす。

そこは『白い空間』としか形容しようのない不思議な空間だった。

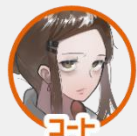
窓のない壁に閉塞感を生じさせる天井。一つしかないドア。

そのどれもが奇妙な非現実感を帯びており、不気味な印象を与えてくる。

困惑していた私は、見知った声に話しかけられ、振り返った。



「やあ。起きたかい？」



「お前は……」

こいつはシロ。私の親友のうちのひとりだ。

私の動揺を知ってか知らずか、彼は私に話しかける。



「突然こんなところで目覚めてビックリしたよね」



「ここはボクの世界。今日は君をこの場に招待させてもらった」



「今から君には、『あの事件』の真相をもう一度、推理してもらう」

シロは喋りながら白い部屋を歩き、扉のノブに手を伸ばした。

彼が手を引いても、がたがたと音がするばかりで扉は開かない。



「御覧の通り、今のボクたちではここから出ることは出来ない」



「君がここから出るための条件は二つ」





「ひとつ、事件の真相を究明すること
ふたつ、引き金を何かに向けて引くこと」

そう言うとき、シロはいつの間にか手に持っていた拳銃をこちらに投げて渡した。
取りこぼさないように慌ててキャッチする。

拳銃にはノイズがはしっており、現実感の薄れるような出来だったが、
何故かそれが本当に人を殺し足りえる凶器であることは本能的に理解できた。



「繰り返し返すけど、ここは精神世界だからね。
僕の記憶に詳しくないものは上手に再現できないんだ」

少し恥ずかしそうにシロは笑った。



「それじゃあ目を閉じて……、一緒に思い出そうじゃないか」

あたまが痛い。
脳が思い出すなと叫んでいる。



「あの日、君の大親友である『フード』は誰に殺されたのか？」

痛い。痛い。
思い出すな。思い出すな。



「……ごめんね。
でも、悔しいだろ？何も知らずに彼女の死を受け入れるなんて、さ……」

シロはドアの前にもたれかかると、こちらをじっと見つめる。

ずしり。
手に持った拳銃が重くなった気がした。

